



和's YAMATO (わずやまと)

2025
秋号

- 郷土史跡めぐり
上野国分寺跡（群馬県高崎市・前橋市）
- 群馬の芸術家 上杉一道
- 写真で楽しむ美しい自然「秋空に舞うアサギマダラ」

- 田沼意次失脚の背景
- 松平定信の登場
- 江戸の米騒動と定信の老中就任
- 意次は政争に敗れ失意の死

政争に敗れた田沼意次
松平定信による清廉政治の幕開け

- 華美と享樂の時代から質素儉約を奨励する世情に
- 改革への不満と重三郎の抵抗
- 言論統制の強化と出版界の萎縮
- 幕府権力への挑戦 重三郎の黄表紙出版
- 学術書や役者絵で事業を拡大

江戸の出版界に旋風起こす「江戸のメディア王」
葛屋重三郎の卓越した手腕
お客様紹介 特別企画 スペシャルインタビュー
東京都台東区長 服部征夫氏



「野の想い」フジバカマとキタテハ 須藤和之画



写真で楽しむ 美しい自然

『秋空に舞う アサギマダラ』群馬県高山村

《撮影》藤重朋紀氏

略歴	1952 群馬県利根郡みなかみ町生まれ	2001 フリー
	1971 群馬県渋川高等学校卒業	2010 写真集「上州路・一本桜」
	1972 東京写真専門学校中退	2011 写真集「上州路」
	1979 コマーシャルフォトスタジオ創美社	



表紙の絵
「野の想い」フジバカマとキタテハ
《F6号》

須藤 和之 プロフィール

Kazuyuki Sutoh Profile

1981年 群馬県前橋市生まれ
2005年 多摩美術大学絵画学科日本画専攻卒業 2007年 東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻 保存修復日本画修了 2010年 同大学大学院 保存修復日本画博士課程修了 博士号取得 博士審査展 お仏壇のはせがわ賞特別賞 個展(画廊翠樹)(同2011~25) 2011年 中央電機商会カレンダー原画(2011~25) 2013年 アーツ前橋開館記念展出品、群馬銀行創立80周年記念収蔵作品制作 2014年 個展(日本橋三越本店)(同2017,20,23) 2017年 群馬県展 県知事賞 2016年 個展(株式会社ヤマト)
2019年 高崎市タワー美術館トップランナーIII出品 2020年 上毛芸術文化賞受賞 2022年 個展(株式会社ヤマト)
2023年 群馬銀行創立90周年記念 収蔵作品制作 現在 日本美術院院友 群馬県美術会理事 慶應義塾大学非常勤講師(2013~25)
OFFICIAL WEBSITE:SUTOOO.NET URL <http://sutoooo.net/>



和's YAMATO わずやまと

2025年秋号(第66号)

《和's YAMATOの由来》ヤマトの漢字の「和」、Water & Airの頭文字を合わせて「WA」、「S」はスタート。

和'sYAMATO初春号 2025年(令和7年)9月発行

発行:株式会社ヤマト広報室 群馬県前橋市古市町118 TEL.027-290-1891 FAX.027-290-1896

建設プロダクト

【発行】株式会社ヤマト 〒371-0844 群馬県前橋市古市町118 TEL:027-290-1800(代) FAX:027-290-1896

支店/東京、埼玉、栃木、横浜、千葉、高崎、東北 営業所/軽井沢、伊勢崎、神奈川県央、茨城、太田、東松山、長野、渋川、川口、多摩、横須賀、青森
附属施設/大和環境技術研究所、大和分析センター、加工センター、朝倉工場、教育センター、コンタクトセンター、サポートセンター、プロダクトセンター
ヤマトホームページ <https://www.yamato-se.co.jp/>



東京都台東区長 服部征夫氏



2025年大河ドラマ「べらぼう」の主要な舞台は、江戸時代の吉原（現在の東京都台東区）です。台東区内には上野、浅草をはじめ、江戸文化が色濃く残る地域があり、内外の観光客で賑わっています。（株）ヤママトは昭和50年（1975）に上野駅前に東京支店を移転開設して以来、台東区内に50年間支店を構え、台東区様とは深い結びつきがあります。このたび、服部征夫台東区長にご登場いただき、大河ドラマ「べらぼう」の活用や台東区の観光・福祉政策について、お話を伺いました。聞き手は笠原正道東京支店副支店長です。

笠原 はじめに、大河ドラマ「べらぼう」重栄華乃夢噺の主人公葛屋重三郎（以下、葛重）について伺います。葛重は今まで余り知られていない人物なので、葛重を扱った書籍でも描かれ方は様々です。葛重の人物像など、区長様のご感想をお聞かせください。

服部 御社で発行されている和、s YAMATOは、葛重のことを良く研究されており、理解が深まります。このような冊子を発行していただくことは、大変ありがたいと感じています。

一昨年に大河ドラマ舞台地のお話をいただいた時には、葛重のことを理解している方は少なかったように感じます。そこで、葛重に関する講演会を開きましたら、定員を超える申し込みがあり、若い女性も多く来場していました。「べらぼう」のバブリックビューイングには、定員の18倍の応募があり、関心の高さがうかがえ、この大河ドラマは大きな反響を生むのではないかと感じました。

吉原で生まれ育ち、江戸時代の出版に大きな功績を残した葛重の存在は、地元として大変誇りに感じています。葛重の菩提寺である正法寺（しょうぼうじ）には、葛重の人物像を紹介した碑文があり、それに

は「人とのつながりを作ることに長け、傑出した人物である」旨が記されています。この碑文は、葛重と親しかった狂歌師の石川雅望によるもので、その評価は現在まで続いており、私たちが見習う点も多々あると感じています。これからのドラマの展開を楽しみにしています。

笠原 ありがとうございます。次の質問に移らせていただきます。

台東区様では高齢者施設等の整備などを積極的に進められておりますが、今後さらに深刻化が予想される少子高齢化への対処について、お考えをお聞かせ願えればと思います。

服部 まず高齢化対策についてお話しします。わが国の高齢化率（総人口に占める65歳以上人口の割合）は29%以上に達し、過去最高を更新しており、これは世界最高水準の数字となっています。台東区の高齢化率は20.5%と5人に1人の割合となっています。台東区の高齢者が、長く住み慣れた地域で暮らし続けることが出来るように、区として様々な施策に取り組んでいます。

台東区は、東京23区の中で最も狭い面積ですが、限られた資源を活用して、時代に

つて子供を産み育てられるように、当事者の視点に立った施策を展開していきます。

笠原 当社でも育児休暇などの制度も整備しておりますが、企業としての少子高齢化への対応は今後いろいろな対策が必要だと考えています。

続きまして、台東区様に江戸時代から継承されている伝統・文化の魅力や観光施策について、お話しただければと思います。

服部 台東区は町人文化が花開いた江戸の中心地であり、現在も色濃く残る江戸文化は、本区を発展・成長させた活力の源です。8年前には「江戸に学び、未来を拓く」を合言葉に「江戸ルネサンス事業」を開始し、講演会などを定期的に開催するなど「江戸たいとう」の魅力の発信に取り組んできました。徐々に台東区に培われた江戸文化の良さが再認識されつつある中、大河ドラマ「べらぼう」の放送が始まりました。大河ドラマの放送は、本区の歴史・伝統・文化を区の内外に発信する絶好の機会ととらえており、地域活性化に取り組んでいます。

浅草寺を中心とした浅草、文化施設が

（次ページへ続く）



台東区民会館入口 西側（べらぼう 江戸たいとう 大河ドラマ館）



区長室でのインタビューの様子



べらぼう 江戸たいとう 大河ドラマ館 エントランス



たいとう江戸もの市の浮世絵関連グッズコーナー

集積する上野、下町風情が残る谷中など、観光客が大幅に増え、外国人観光客は前年比45%増となり、活況を呈しています。さらに、今年になって薦重ゆかりの地である浅草北部の吉原(現在の千束)に観光客が訪れるようになりました。江戸新吉原耕書堂など、ゆかりの地をめぐる循環バスも好評をいただいております。大河ドラマを契機とした浅草北部の活性化に手ごたえを感じています。

また、国際観光都市としての持続的な発展のためには、来街者の受入環境の整備と、区民生活の質の確保を両立させる必要があります。令和8年度を目標に、「(仮称)観光振興指針」の策定を準備しており、観光客、区民、事業者が満足できる受入環境の整備を進め、台東区が持つ伝統、文化の魅力を最大限に引き出し、多様な主体と連携しながら、持続可能な観光づくりに取り組みたいと思います。

「べらぼう 江戸たいとう 大河ドラマ館」に隣接しているお土産館の「たいとう江戸もの市」では、浮世絵、手ぬぐい、お菓子など台東区ならではのお土産約500種類を展示販売しています。

また、体験型の観光として、従来の型にはまらない、外国人観光客も対象にしたゴミ

拾い体験を計画しています。外国人の方にゴミ拾いをする習慣は無いので、この新しい試みがどのように受け止められるか、期待しています。また、台東区では、大江戸清掃隊という清掃ボランティア活動を実施しており、一つの文化として定着しています。

笠原 最近では、百貨店の売上げが落ちていると聞きます。インバウンドが増えているのに売上げが減るのは、円安効果の目減り及びモノ消費よりコト消費が増えているとのことですね。いわゆる爆買いではなく、日本の文化に触れることができる体験型の消費です。ゴミ拾い体験は、外国人にはない感覚でしょうから、面白いと思います。

以上で質問は終わります。服部台東区長には、公務が多忙のところ、大河ドラマ「べらぼう」と薦重、少子高齢化対策、台東区における伝統、文化による活性化策など、多岐にわたってお話しいただき、感謝いたします。ヤマト東京支店でも三社祭りへの積極参加・大江戸清掃隊などに取り組んでいますが、まだまだ足りないと感じています。台東区様をより一層盛り上げていくためにも、持続可能な活動を台東区様と連携して継続したいと思っています。本日は誠にありがとうございました。(構成…木下直也)



(株)ヤマト東京支店の大江戸清掃隊 東京支店周辺の歩道を清掃しました。

台東区長 服部征夫(はっとりゆくお)

生年月日 ○ 昭和18年1月8日
出身 ○ 福岡県
略歴 ○ 日本大学法学部卒業
○ 台東区議会議員(昭和50年 5期)
○ 台東区議会議員(昭和62年)
○ 東京都議会議員(平成11年 5期)
○ 台東区長(平成27年 現在3期目)
座右の銘 ○ 温故創新



インタビューを終えての記念撮影 (左から)矢野東京支店営業部長、服部区長、笠原東京支店副支店長、木下総務部広報室長

和's YAMATOに掲載させていただいた台東区様発注工事

特別養護老人ホーム竜泉(右)と 竜泉福祉センター「いきいきてらす」



2025年春号掲載

空調設備更新工事施工業者…ヤマト・営木・浅草特定建設工事共同企業体

台東区立浅草公会堂



空調設備更新工事施工業者…ヤマト

2022年春号掲載

台東区立蔵前小学校新校舎



給排水設備工事施工業者…ヤマト・浅草・松栄特定建設工事共同企業体

2019年夏号掲載

江戸の出版界に旋風起こす「江戸のメディア王」

Tsutaya Juzaburo

葛屋重三郎の卓越した手腕

葛屋重三郎は江戸時代の安永元年（1772）に、浅草・吉原で貸本屋を開業し、わずか10年ほどで江戸の出版界をリードする地位を固め、才能のある作家や絵師を発掘し、「江戸のメディア王」、「江戸文化のプロデューサー」と称されるようになる。世襲による既得権益の継承が主流の時代に、一代での劇的な躍進の背景には、田沼意次による経済活性化策と社会の自由化がある。重三郎はその時流に乗って出版メディアの新たな企画を連発し、江戸文化をけん引したのだった。

華美と享楽の時代から質素儉約を奨励する世情に

田沼意次が失脚したことで、自由な雰囲気の中で発展した田沼時代は終わりを告げ、江戸の文化も大きな転換期を迎える。

意次に代わって、天明7年（1787）6月に松平定信が老中首座となった。定信は田沼時代末期に起きた大規模な江戸の米騒動に強い危機感を抱いており、米価高騰による社会不安を深く憂慮していた。定信の登場で、

世間では政治が改革されることへの期待が膨らんだ。田沼時代は積極的な経済政策を推進し、経済や社会の発展、文化の活性化をもたらしたものの、社会・経済の自由な雰囲気の問題視され、定信は綱紀粛正を図る。

具体的には、質素儉約と文武奨励が強く打ち出された。定信の質素儉約は、吉宗の享保改革を模範とし、自らも一日二食、木綿の衣服を着用するなど、質素な生活を実践した。さらに、聖域であった大奥の経費までも大幅に削減し、武士、町人、農民にも贅沢な暮らし

を戒め、質素儉約を励行した。特に江戸の町に対しては、高価な菓子や製菓禁止、女性の衣類の規制、雛人形の大きさ制限など、日常生活にまで踏み込んだ細かな規制を設けた。

一方、文武奨励は旗本や御家人などの幕臣が対象だった。田沼時代に横行した賄賂や、武士が黄表紙や洒落本を執筆し、狂歌を詠むといった文化活動に従事することを、定信は「土風頹廢」と見なした。そのため、幕臣には「文武両道」に励むよう求め、「学問吟味」や「芸術見分」として

学力試験や武芸の試験を行い、優れた人材を登用する方策を実行した。

改革への不満と重三郎の抵抗

しかし、こうした改革の名の下に行われた社会の引き締め策には、当初定信を歓迎した世間も、次第に息苦しさを感ずるようになった。武士、町人、農民、誰もが窮屈な政治への不満を募らせていった。その不満を風刺した落首として有名な「白河の清きに魚も

棲みかねて」との濁りの「田沼恋しき」だ。これは、清廉潔白さを追求した定信の改革が息苦しく、むしろ社会が乱れていた田沼時代の方が恋しいという、名もない庶民たちの怨嗟の声を表していた。

次第に変化する社会の空気を敏感に察知したのが、時流に聡い重三郎だった。彼は世相をパロディー化し、シニカルな諷刺で笑いを取るという黄表紙の特性を活かし、寛政の改革を茶化する作品を世に送り出す。

最初に刊行されたのは、天明8年（1788年）正月の朋誠堂喜三三作「文武二道万石通（ぶんぶにどうまんごくどおし）」だった。この作品は鎌倉時代を舞台に、源頼朝（少年とし

て描かれる）が重臣・畠山重忠（定信の紋である梅鉢紋の袴を着用）に命じ、武士たちを文武どちらかに振り分ける物語だ。どちらにも属さない「ぬらくら武士」が文武の道に精進するよう諭される様子が滑稽に描かれ、定信の文武奨励策への痛烈な皮肉となっていた。頼朝を少年として描くことで、当時の將軍・家斉と重ね合わせる仕掛けも施され、書名も玄米ともみ殻を選別する万石通しにかけている。

この作品は、「古今未曾有の大流行」と評されるほどの大ヒットを記録する。この成功を受け、重三郎は翌年の寛政元年（1789）正月に、恋川春町作「鸚鵡返文武二道」おうむがえしぶんぶのふたみち」を出版する。この作品は平安時代が舞台で、菅秀才（菅原道真の子、定信がモデル）が武を奨励すると、過度な武勇の競い合いが混乱を招くので、今度は文を奨励すると、人々はその教えを勘違いし、社会に滑稽な現象が起きているという内容だ。「鸚鵡返し」のように文武奨励に愚直に従った結果、混乱が生じたというストーリーは、もはや政治批判と受け取られてもおかしくない



文武二道万石通 国立国会図書館蔵

過激なもので、大ヒットを記録する。さらに重三郎は、狂歌師の唐来三和（とうらいさんな）による黄表紙「天下二面鏡梅鉢（てんかいちめんかがみのうめばち）」を出版する。この作品

は、菅原道真（定信）の政治により、佐渡金山が爆発して小判が降り注ぎ、五穀豊穡のあまり翌年の年貢まで前納できるといった、現実とは真逆の光景を描き出し、浅間山の噴火や大凶作といった厳しい現実とはかけ離れた「褒め殺し」によって、道真（定信）の政治を痛烈に皮肉った。この諷刺が、改革に不満を持つ人々に強く響き、製本が間に合わないほどのヒットとなった。

言論統制の強化と出版界の萎縮

寛政改革を風刺した黄表紙は軒並み世間の喝采を浴びたが、定信にとっては自らの信念を込めた政治への公然たる批判であり、看過できるものではなかった。定信の側近である水野為長は、幕政や役人の動向、さらには市中に流れる様々な風説を密かに収集して定信に報告していた。改革を風刺する黄表紙が世間の人気を得ていることも報告され、定信はこれを由々しき事態と捉え、断固たる姿勢で臨むこととなる。

寛政元年（1789）4月頃には、江戸市中に「秋田藩佐竹家の家老である朋誠堂喜三三が定信を風刺する作品を刊行したため、定信が佐竹候に直接クレームを入れ、喜三三が国元に帰された」という風説が流布した。



鸚鵡返文武二道 国立国会図書館蔵

定信が直接クレームを入れた事実は無かったが、佐竹家は藩士が幕政批判を展開していると受け取られることを恐れ、喜三三こと秋田藩士・平沢常富に執筆活動の自粛を命じた。喜三三は狂歌などの文芸活動は続けたものの、黄表紙の執筆は停止せざるを得なくなつた。喜三三の黄表紙が出版されなくなつたことは世間で憶測を呼び、「定信の圧力に屈したからではないか」という噂が広まった。定信による言論統制の強化は、黄表紙という庶民文化を通じて社会への不満を表現してきた重三郎に大きな影響を与え、その活動を萎縮させていった。



画本東都遊（えほんあづまあそび）

国立国会図書館蔵

耕書堂の店内。葛飾北斎画。享和2年（1802）の作品で、葛屋重三郎の模倣と考えられる。

蔦屋重三郎関係年表

寛延3年(1750)	1才	1月7日：吉原で生まれる。父は丸山重助と母は広瀬津与
宝暦10年(1760)	11才	5月：徳川家治が10代将軍となる 前将軍家重の御側御用取次田沼意次、引き続き家治の御側御用取次を勤める
明和4年(1767)	18才	7月：意次、側用人に昇進
明和6年(1769)	20才	8月：意次、老中格に昇進
明和9年・安永元年(1772)	23才	1月：意次、老中に昇格。この年、吉原大門口の五十間道で書店耕書堂を開店。
安永2年(1773)	24才	この年、吉原細見の販売を開始
安永3年(1774)	25才	7月：遊女評判記『一目千本』(最初の出版物)を刊行
安永4年(1775)	26才	7月：吉原細見の出版を開始
安永6年(1777)	28才	この年、富本節正本・稽古本を出版できる株を取得
安永9年(1780)	31才	この年より、黄表紙、洒落本、往来物の出版を開始
天明元年(1781)	32才	閏5月：一橋治済長男豊千代(後の家斉)、将軍継嗣となる 12月15日：意次嫡男田沼意知、奏者番に抜擢
天明3年(1783)	34才	7月：浅間山の大噴火 9月20日：西上野で上信騒動勃発 9月：通油町の地本問屋丸屋小兵衛店舗と蔵を買い取り、移転。地本問屋の株も入手 11月1日：意知、若年寄に昇進。この年より狂歌本の出版を開始(後に狂歌絵本も出版)
天明4年(1784)	35才	3月24日：意知、江戸城中で新番佐野善左衛門に斬られる(26日に死去)
天明6年(1786)	37才	6月29日：全国御用金令発令 8月24日：御用金令、印漕沼干拓工事中止　25日:将軍家治死去　27日:意次、老中辞職 9月6日：御三家、家治の遺言により幕政に参与(9/7、一橋治済も幕政に参与) 閏10月5日：意次、2万石減封と謹慎を命じられる 12月15日：御三家が幕閣に対し、松平定信を老中に推挙(翌年2/28、幕閣は定信の起用を拒否)
天明7年(1787)	38才	4月15日：家斉が将軍職就任 5月20日：江戸で大規模な米騒動勃発　29日:定信起用に反対する御側御用取次横田準松罷免 6月19日：定信、老中首座に就任 10月2日：意次、二万七千石没収、隠居、蟄居謹慎を命じられる
天明8年(1788)	39才	1月：朋誠堂喜三『文武二道万石通』出版 7月24日：意次死去(享年七十)
寛政元年(1789)	40才	1月：恋川春町『鸚鵡返文武二道』出版 7月：春町死去
寛政2年(1790)	41才	5月：町奉行所が書物問屋仲間に出版取締令を布告 10月：町奉行所が地本問屋仲間に行事を置くことを命じる
寛政3年(1791)	42才	3月：書物問屋仲間に参加。出版取締令違反により山東京伝の洒落本『仕懸文庫』など三冊が絶版。京伝は手鎖五十日、重三郎と行事二人は身上に応じた重過料の判決が町奉行所で下る
寛政4年(1792)	43才	5月：林子平の『三国通覧図説』、『海国兵談』が絶版、子平は仙台での蟄居 版元の須原屋市兵衛は過料30貫文、行事は過料10貫文の判決が町奉行所で下る
寛政5年(1793)	44才	7月23日：定信、老中退任　8月、美人画でモデルの名前を書き入れることが禁止
寛政6年(1794)	45才	5月：東洲斎写楽の役者絵を大量に出版(～翌年1月)
寛政7年(1795)	46才	3月25日：伊勢松坂に赴き国学者本居宣長と対面
寛政8年(1796)	47才	8月14日：美人画で判じ絵を書き入れることが禁止。秋、脚気が重くなり病の床に就く
寛政9年(1797)	48才	5月6日：重三郎病没。山谷の菩提寺正法寺に葬られる



山東京伝の見世 歌川豊国画 18世紀　出典:ColBase

山東京伝が、京橋銀座一丁目に開いた煙草入れ屋の店先を描いたもの。店の奥にいる京伝は、吉原の名高い遊女花扇(はなおうぎ)と話している。

喜三が黄表紙から撤退した後、定信は寛政元年4月に「鸚鵡返文武二道」を執筆した恋川春町にも、主家の小島藩を通して出頭を命じた。春町は病気を理由に出頭を拒否するが、度重なる出頭命令が下る中、同年4月に春町は突然この世を去った。春町の主家小島藩松平家は家康と祖を同じくする松平一門として、幕府の役職が勤められる譜代大名だった。定信が藩主を勤める白河藩松平家は家康の弟を藩祖とする伊予松山藩松平家の分家で、同じく譜代大名だった。

施政を批判されることは、後ろから矢が飛んでくるようなもので、その点でも看過できなかっただろう。よって、小島藩には強い姿勢で臨んだため、小島藩の重臣だった春町は対応に苦慮し、自殺に追い込まれたとも考えられる。先述した喜三が執筆の自粛で済んだのは、主家が秋田藩佐竹家の外様大名で、幕府としては譜代大名に比べれば遠慮があり、強く出にくかったのかもしれない。喜三は運が良かったといえる。

幕府権力への挑戦 重三郎の黄表紙出版

寛政2年(1790)5月、幕府は風紀を乱す出版を規制するため、出版取締令を発した。黄表紙を扱う地本問屋に対して同業者間の自主規制を命じ、地本問屋の行事検閲者二名の承認が無ければ出版できないようにした。

この頃、重三郎がプロデュースした洒落本作家の山東京伝は、執筆意欲を失っていた。出版規制が強化されたことに加え、同業者である朋誠堂喜三が筆を折り、恋川春町が命を絶つたという噂も耳に入っていたことが原因である。しかし、次々と人気作家を失い経営に陰りが出ていた重三郎にとっては、京伝まで失うことは出版事業の継続が困難にな

ることを意味した。重三郎は京伝を懸命に説得し、断筆の意思を撤回させる。重三郎は、幕府の強権を振るつての出版統制に対し、強い対抗心を持つこととなった。

寛政2年(1790年)春頃から、山東京伝は新刊の「仕懸文庫(しかげぶんこ)」(深川の遊郭を題材にした洒落本)など、3冊の執筆に取りかかり、同年7月には原稿が完成した。しかし、洒落本を出版するには、行事役2名の承認が必要になる。同年12月、重三郎は洒落本3冊の写しを行事役の吉兵衛と新右衛門のもとに持ち込み、発売を許可してほしいと依頼する。当時の出版環境では、遊郭を題材にした書物は風紀を乱すとして出版は難しいと判断されるところだが、二人の行事はこれを「発売しても差し支えない」と認定し、重三郎は寛政3年正月に発売に踏み切った。これらの洒落本は大ヒットし、重三郎は大いに利益を得たが、幕府はこの出版を問題視し、町奉行所から呼び出しがかかる。

吟味の結果、出版取締令に違反しているとして、作者の京伝は手鎖50日、重三郎と行事二人は身上に応じた重過料という罰金刑を受けた。重三郎は、行事の検閲を通過すれば出版ができる制度を利用し、行事を懐柔したのかもしれない。幕府としては、今回の重三郎の処罰は見せしめで、一罰百戒の効果を狙っ

たものと思われるが、重三郎は罰金を受けても出版への意欲は衰えなかった。

学術書や役者絵で事業を拡大

寛政2年(1790)に幕府は儒学の中でも朱子学を正学とする寛政異学の禁を発する。朱子学が正学とされたのは、儒学の中でも身分秩序を重視しており、幕府にとって都合の良い学派だったからである。寛政異学の禁により、湯島聖堂(後の昌平坂学問所)では、朱子学以外の学問を教えることが禁じられる。一方、庶民には親孝行など善行を積むことを奨励した。こうした社会情勢に合わせ、重三郎は寛政3年に歴史書、辞書など硬派の出版物を扱う書物問屋の株を手する。書物問屋になれば、販売ルートの拡大も可能になり、営業力の強化へと直結した。

出版事業に規制をかける幕府に抵抗し、処罰を受けながらも屈することなく、時代の波を読んで学術書など新たな分野に進出する重三郎は、転んでも再起する事業家であり、さらに浮世絵師の葛飾北斎や、東洲斎写楽の才能を見出していく。

主要参考文献…『蔦屋重三郎と田沼時代の謎』安藤優一郎著 文…木下直也

政争に敗れた田沼意次

Matsudaira Sadanobu

松平定信による清廉政治の幕開け

天明6年（1786）8月、田沼意次は天明の大飢饉、印旛沼干拓事業の頓挫、御用金政策の行き詰まりなど失政の責任を取り老中を辞職した。將軍になることを諦めていた白河藩主の松平定信は、従兄の治済（はるさだ）と手を組み老中の座を目指す。

田沼意次失脚の背景

田沼意次が老中を退いた後も、幕閣は井伊直幸（なおひで）を大老に据え、松平康福（やすよし）、牧野貞長（さだなが）、水野忠友（ただとも）、鳥居忠意（ただおき）らを老中とした。康福と忠友は意次と姻戚関係にあり、直幸も分家の井伊直朗（なおあきら）が意次の四女を妻としていたことから大老に就任できた経緯があり、同じく「田沼派」と見なされていた。意次としては、譜代筆頭の井伊家を大老職に就けることで、自身の権力基盤を強化する狙いがあった。

しかし、第10代將軍徳川家治（いへはる）の死後、世子である14歳の徳川家斉（いへなり）が將軍職を継ぎ、家治の遺言により、徳川一門

である御三家（尾張・紀州・水戸）と御三卿（田安・橋・清水）が、將軍が若年であることを理由に、特例として幕政に参与することとなった。特に、家斉の実父である橋治済は、御三家と共に幕閣に強い影響力を持つようになる。

彼らは意次の政策、特に御用金政策を強く批判し、「下々の難義を厭わずに政策を推し進めた」ことを問題視し、単なる御役御免だけでなく、改めて政治責任を取らせるよう求めた。これにより、幕閣は意次の処罰に踏み切る。

治済にとって意次は家斉を世子に据えてくれた恩人であるのに、この機に乗じて意次の影響力を排除し、家斉の時代における自らの発言権を強めようとしたと考えられる。意次を失脚させた治済は、次なる老中として白河藩

主の松平定信を擁立する画策を始める。

松平定信の登場

松平定信は宝暦8年（1758年）に田安家初代当主宗武（むねたけ）の七男として生まれた。彼は吉宗の孫にあたり、本来であれば將軍の座もあり得る立場だった。しかし、安永3年（1774年）に譜代大名である白河藩主松平定邦（さだくに）の養子となる。これは、定邦が徳川一門から養子を迎えることで、白河藩の家格を上げようとしたためだった。

同年8月、実家の田安家の当主であった兄の治察（はるあき）が死去し、跡継ぎがいなかったため田安家は定信を白河藩から戻そうとしたが、田沼政権はこれを認めなかった。こ

となつていれば、將軍継嗣候補として第11代將軍の座も夢ではなかったという思いがあり、その夢を碎いたのは意次だと考えていた。意次の失脚を受け、定信は従弟の治済と手を組み、老中を目指す、擁立運動は難航した。

江戸の米騒動と

定信の老中就任

定信の老中起用を巡る政争が続く中、江戸では天明6年（1786）7月以来の米価高騰が深刻化していた。翌天明7年に入っても事態は好転せず、5月には米価がさらに高騰し、江戸の治安は悪化の一途を辿る。幕府は米問屋に米の放出を促すが、買い占めや売り惜しみは止まず、飢えに苦しむ町人が続出した。そして、大坂で米問屋などの打ちこわしが起こると、この「天明の打ちこわし」は全国各地に波及する。江戸でも米問屋などが打ちこわしに遭い、その波は江戸一円に広がっ

た。これが、定信の老中擁立運動を大きく進展させるきっかけとなる。

將軍家斉は、打ちこわしによる市中の騒乱を耳にするが、御側御用取次（おそばごようとりつぎ）の横田準松（よこたのりとし）は「平穩無事」と報告する。横田は將軍側近として幕閣にも影響力を持つ実力者で、かつての意次のような立場にあった。しかし、家斉は治済と繋がりがあった御庭番（世間の噂などを報告する者）からの報告で江戸の異変を知らされる。真実を伝えなかった横田に家斉は激怒し、天明7年5月に横田を罷免する。横田は定信の老中起用に強く反対しており、幕閣も横田の意見を後ろ盾に御三家の申し入れを拒否していたが、横田の罷免により状況は一変し、定信の老中起用を受け入れることになった。家斉の実父である治済が強く望んだ人事でもあり、その意向に配慮する必要もあった。

昌平橋聖堂神田川

江戸百景（安政4年刊）広重画

手前（右下）に描かれた木橋が昌平橋。対岸の坂道に築地塀が並ぶのが湯島聖堂。湯島聖堂（ゆしませいどう）は元禄3年（1690）に江戸幕府5代將軍徳川綱吉によって建てられた孔子廟で、寛政9年（1797）の「寛政異学の禁」により幕府直轄の「昌平坂学問所」となる。

6月19日、定信は念願の老中に起用され、その首座を務めることになる。これはまさに政変で、7月6日には勝手掛（かつてがかり）を兼務し、幕府の財政を掌握した。その後には將軍補佐役も兼ね、その権力基盤は著しく強化された。この年30歳になったばかりの定信は、祖父吉宗の享保（きょうほう）改革に倣い、「寛政の改革」を断行していくことになる。

江戸の打ちこわしと、家斉に提出された御庭番の報告が、寛政の改革を導いたのだった。

意次は政争に敗れ失意の死

定信という政敵が老中に起用されたことは、意次にとって大きな打撃だった。天明6年10月に2万石の没収と謹慎を命じられたが、同年12月には謹慎が解除されていたため、これ以上の処罰はないと考えていたであろう。しかし、定信が意次の政治を批判する御三家や治済を後ろ盾に幕政のトップに立ったことで、さらなる処罰は避けられないものとなった。

天明7年（1787）10月、老中在職中の不正を理由として、意次に対し2万7千石の没収、隠居、蟄居謹慎が申し渡される。前回の処罰では理由が明確ではなかったが、今回は「在職中の不正」と明示され、幕府は田沼の政治を明確に否定した。一代で6000石の旗本から5万7千石の大名に成り上がった意



田安門

享保16年（1731）八代將軍吉宗の第二子宗武は田安家を興した。宗武の子・松平定信はここで生まれた。現在田安門がある北の丸公園には、田安門から南北をつらぬくように西側一帯を田安家、東側一帯を清水家が所有していた。

れにより田安家は当主不在となり、將軍継嗣のレースから脱落する。

その後、將軍家治の嫡男である家基（いえもと）が急逝したため、家治は治済の長男である家斉を養子に迎えることを決める。この養子選定に関わったのが意次だった。天明元年（1781）、家斉は將軍継嗣となった。実家に戻れなかった定信は、天明3年（1783）に松平家の家督を継いで白河藩主となる。26歳の時だった。折しも、天明の大飢饉により米価が高騰し、東北各地では餓死者が続出する中、定信の治める白河藩では餓死者を二人も出さなかったため、「名君」としての評判を得る。

幕政への参画を志す定信は、意次に対して激しい敵意を抱いていた。田安家に戻り当主

次は、2度目の減封により1万石となつてしまふ。大名としての身分は保たれたものの、家督相続が許された孫の田沼意明（おきあきら）、意知の長男は相良（さがら）領を召し上げられ、陸奥国信夫郡（むつのくに）のぶぐん）と越後国頸城郡（えちごのくに）くびきぐん）で改めて1万石を与えられた。田沼家は城持ち大名ではなく、陸奥国信夫郡下村に陣屋を構えることになる。意次が築城を許された相良城が破却されたことは、田沼時代の終わりを視覚的に示す出来事だった。

幕政のトップに立った定信は、江戸の打ちこわしで噴出した人々の不満を鎮静化させ、田沼時代に代わる新時代の到来を世間に認識させることが喫緊の課題だと考えていた。そのためには、意次の政治がいかに悪政であったかをアピールし、人々の不満を意次に向けさせ、自身への期待を高める必要があった。天明7年10月の二度目の処罰は、世論の誘導を狙った追罰だったといえる。意次には悪役でいてもらう必要があった。

天明8年7月24日、意次は名誉を失い、減封の処罰を受け、失意のうちに70歳でこの世を去る。田沼時代の悪印象は、後世に語り継がれていた。

主要参考文献…『寛政三郎と田沼時代の謎』安藤優一郎著
文…木下直也

上野国分寺跡

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 上席調査研究員・資料統括 橋本 淳

鎮護国家を祈った「国の華」



1 上野国分寺の推定復元図

2 講堂基壇から塔基壇・南辺築垣を望む

2025年8月撮影

国分寺とは

今から1300年近く前の天平年間、天候不順による凶作が続き、飢饉が起きました。これに追い打ちをかけるように、天平7(735)年と天平9(737)年に疫病の天然痘が大流行し、大きな社会不安に陥りました。当時の人口の3分の1の人々が亡くなったとの推計もあります。こうしたなか、聖武天皇は天平13(741)年に「国分寺建立の詔」を発し、国ごとに国分(僧)寺と国分尼寺を造営して僧侶たちに読経させることで、国家・社会の安定を図ろうとしました。この詔は、全国60余か国・斉に国分二寺の造営を命じた一大国家事業で、国分寺は仏教の力によって国を護る「鎮護国家」を祈る官立寺院でした。そして、七重塔を持つ国分寺は「国の華」とされました。

上野国分寺の伽藍

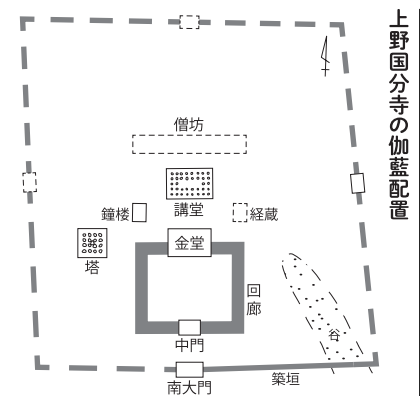
上野国分寺の寺域は東西219m、南北231m程の規模と推定され、その境

界を築垣(土塀)が廻っていました。その区画を、現在でも道路などの地割として見ることが出来ます。内部の主要建物は、昭和と平成の2期にわたる発掘調査によって南から南大門、中門、本尊である釈迦如来像を安置する金堂、僧侶が経典を講読するための講堂が一直線に配置されていたことが分かっています。

そして、金堂と中門が回廊によって結ばれ、寺院のもっとも重要な儀礼空間をつくっています。七重塔は、回廊の外に置かれました。こうした配置の場合、塔を金堂より前の位置に置く例が多いのですが、上野国分寺は塔と金堂を東西に並べて配置するということに大きな特徴があります。塔と金堂を並置させる配置は国分寺のなかでは古い様式で、上野国内の豪族たちが聖武天皇の詔を忠実に受け止め、協力していち早く完成させたと考えられています。七重塔の高さは約60・5m(前橋市役所とほぼ同じ高さ)と推定されていて、全国最大級の



3 上空から見た上野国分寺跡



上野国分寺の伽藍配置

遺跡位置(国土地理院5万分の1地形図「前橋」)



4 上野国分寺跡



出土した軒瓦



5 七重塔の復元模型

整備された上野国分寺跡

上野国分寺跡は、寺域全体がほぼ完全な形で残っている、全国的に見ても非常に貴重な国分寺遺跡です。現地には、昭和に行われた第1期の発掘調査成果に基づき、南辺築垣の一部や塔と講堂の基壇(建物の基礎)が復元されていて、往時を偲ぶことができます。特筆すべきは心礎(心柱を支える礎石)を含め、塔基壇に置かれた17個の礎石のうち15個が建てられた当時のまま、つまり1300年近く前の奈良時代に置かれた「ホンモノ」ということです。さらに講堂の礎石も36個中15個が当時のものです。その中には柱座を2段に加工したものもあり、上野国分寺の荘厳さをうかがい知ることができます。

ガイダンス施設「上野国分寺館」

南の駐車場側から入ると、国分寺橋を渡って左手にガイダンス施設「上野国分寺館」があります。ここには発掘調査

時の写真や出土した遺物などが展示されていて、常駐する解説員が丁寧に解説してくれます。20分の1のスケールで精密に作られた七重塔の復元模型は、見の価値があるでしょう。ガイダンス施設は入館無料で、年末年始以外は無休で開館しています。

国分寺までのアクセス

自動車で訪れる場合は、西毛広幹道から駐車場にアクセスすることが出来ます。また、JR前橋駅から群馬バスと関東交通バスの2路線が出ており、それぞれイオン高崎行き妙見参道、金古王塚台団地行き妙見前で下車していただくと、徒歩で訪れることが出来ます。

最後に、この紙面では上野国分寺跡の魅力をお伝えしきれないので、ぜひ現地に足を運んでいただければと思います。その際には、まずガイダンス施設に立ち寄って解説員の説明を聞いた後に、現地を散策することをおすすめします。

参考資料

- ・須田勉2016「国分寺の誕生」吉川弘文館
- ・群馬県教育委員会2018「史跡上野国分寺跡第2期発掘調査報告書―総括編―」
- ・群馬県2017「史跡上野国分寺跡第2期追加調査報告書」
- ・写真・図提供 群馬県地域創生部文化財保護課

上杉一道

美術研究家 染谷 滋

カヌーで漕ぎ進む画家人生

脳卒中からの復活

上杉一道は画家であると同時にカヌーイストである。インテリアコーディネーターの美枝夫人も同じ趣味を持っている。愛用のカヌーと愛犬のマービーを車に乗せ、二人で日本中の川や湖に出かける。

二〇二六(平成二八)年の大晦日は、本栖湖畔でキャンプをする計画だったが、朝、現地に着いてテントを張ろうとした矢先、上杉を脳卒中が襲った。意識はあるが身体は動かず口もきけない。美枝さんが運転して河口湖の日赤病院へ飛び込み、一命はとりとめたが右半身に麻痺が残った。

左手にペンを持ち替えて文字を書いたのは一か月後。何とか自立歩行ができるようになって、退院したのは半年後だった。その夏には、再びカヌーが漕げることを実践している。

二〇二八年二月、発病後初めての個展をノイエス朝日で開催。その後は毎年一回以上の個展と、4回以上のグループ展や団体展に出品を欠かさない日常が戻った。

度々急流にもまれながらもカヌーを漕ぎ続ける上杉一道の半生を振り返る。

出会いが人生を導く

上杉一道は一九五八(昭和三三)年四月、高崎市に生まれた。身体を動かすのが好きだった上杉は、中学も高校でもバスケット部に所属した。その人生を変えたのは、高崎高校二年生の春に、前年開館したばかりの群馬県立近代美術館で開催された「山口薫展」だった。最初は課外授業で連れて行かれたのだが、すっかり山口作品に魅了され、その後何度も自転車走らせて展覧会を観た。

美術部に転部。当時の高崎高校の美術は、東京藝術大学出身の木村仁が教えていた。親の反対を押し切って、大学は武蔵野美術大学に入学。群馬を離れて、十年続く都会暮らしが始まる。

武蔵美では麻生三郎らの教えを受け、卒業制作は優秀賞を受賞している。在学中、独立展や行動展などの公募展に入選もしているが、その種の団体には距離を置いていた。独立展には4年連続入選して会友の資格を得ていたが、本人はそのことを全く知らず、数年してから知ったことがあったそう。

絵の道に進んだとはいえ、身体を動かすことが好きな上杉はじつとしていなかった。当時夢中になっていたのは

カヌーとの出会い、そして今

この頃になるとバイクでのツーリングは行かなくなった。夫婦で犬を飼い始めたからだ。愛犬も一緒に楽しめる新たな趣味として始めたのがカヌーだった。北海道の釧路川から四国の四十万川まで、車にカヌーを積んで全国を回った。後に自らカヌーを手作りするほど夢中になった。

二〇二二年の東日本大震災では、じつとしていられず現地向った。避難所での炊き出しの手伝いのほか、カヌーを使った入江の瓦礫回収もしたが、作品としては一連の《空の街》に結晶する。「空」に祈りと鎮魂の意味が込められるようになったのは、多分このときからだろう。

オートバイで、そのツーリングで出会ったのが美枝さんだった。バイクにまたがる女性もまだ珍しい時代だった。美枝さんとは一九八六年に結婚。これを機に群馬へ帰郷することになった。

悲しみを超えて

帰郷した上杉は、主に子供たちを対象とした絵画教室「アトリエ・パビット」を始めた。生活基盤を築くと同時に、絵画を通して自分に何ができるかを模索し始める。一九八七年と八八年には、県立近代美術館の群馬青年美術展に出品し、連続して奨励賞を受賞。郷里での順調な船出に思えるかもしれないが、実は大きな不幸が上杉家を襲っていた。

一九八七年七月三〇日、父親が操縦するセスナ機が、自宅に近い碓氷川の河川敷に墜落して即死。六二歳だった。父親は鉄工所を営む傍ら、一九七四年に免許を取得して飛行を愉しんでいた。何らかのエンジントラブルだったと思われるが、事故の原因は分かっていない。少し前には同じコースを息子の一道を乗せて飛んでいる。

その父親が残した鉄工所を「RASENDO」と名付けたギャラリーに改装したのは一九八八年一〇月。画家仲

上杉一道の作品には青い色が好んで使われる。私が勝手に「上杉ブルー」と呼ぶ青は、水の色であり空の色だ。それはいつも上杉の周りにあった色だ。

冒頭で述べたように、二〇一七年からは左手での制作に変わった。「歩く人」がテーマに加わり、ローマ字による言葉の断片が画面に登場し、紙などを貼り付けるコラージュの技法も多用されるようになった。上杉の挑戦は続く。

写真から抽象まで、その時々で画風を変化させてきた上杉の近年の作風は、古代の洞窟壁画やナスカの地上絵を思わせる。太古の人々が神に捧げる絵を描いたように、上杉も地球という大自然の神に向かって絵を捧げているように見える。川を下り、天空へと漕ぎ出した上杉一道の行方を見守りたい。



天空に漕ぎ出す(S25 2025)

略歴 上杉一道 KAZUMICHI UESUGI

- 1958 高崎市に生まれる。
- 1975 高崎高校2年の春、山口薫作品に接し画家を志す。
- 1977 第2回群馬青年美術展入選。会期中に高崎高校卒業。武蔵野美術大学入学。麻生三郎らの指導を受ける。
- 1980 独立展に出品('83年まで)。
- 1981 武蔵野美術大学卒業・卒業制作優秀賞。
- 1983 上野の森美術館絵画大賞展入選(同'87,'10賞候補)。
- 1986 10年間の東京生活から帰郷。ギャラリーふかまちで個展(同'87)。アトリエ・パビットを開設し、主に子供を対象とした造形教室開始。群馬県美術展に初出品('93準会員、'01会員)。
- 1987 第13回群馬青年美術展で奨励賞受賞(翌年も)。
- 1988 父親の鉄工所を改修し「RASENDO」ギャラリー開設。
- 1989 モダンアート展に出品('97年まで)。
- 1993 アヴァンギャルディア結成、グループ展開催('95年まで)。
- 1998 北の大地展ビエンナーレ・日本エアシステム賞受賞。
- 2004 写実画壇展に出品(以後毎年)。
- 2005 広瀬画廊で個展(同'06,'07,'09,'10,'11,'13)。
- 2012 高崎市庁舎21階展望ロビーに《空の街》展示。
- 2016 大晦日に旅行中の山梨で脳卒中を発症。
- 2017 半年間の入院生活から退院するも右半身は元のように動かず。
- 2018 ノイエス朝日で個展(同'20,'22,'24)。
- 2019 ギャラリー空華で個展(同'21,'23,'25)。
- 2020 高崎高島屋で第1回蒔の会展(以後毎年)。
- 2021 第72回県展で山崎種二記念特別賞受賞。
- 2023 高崎高島屋で個展。

その他、画廊翠巒、詩季画材、はまゆう山荘などで個展・グループ展等多数。現在、写実画壇会員・群馬県美術会理事・高崎市民展審査員。